

[dōk]

DONC どんく

発行

三重日仏協会

SOCIETE FRANCO-JAPONAISE DE MIE

〒514-0006 津市広明町418
418, Komei-cho Tsu-shi
TEL. 059-226-2766
FAX. 059-229-0967

N° 56 avril 2001 SOCIETE FRANCO-JAPONAISE DE MIE

神戸日仏協会が100周年記念パーティー 各地の日仏協会もお祝いに参加



神戸日仏協会の活動に貢献してきた人たちに貝原会長(兵庫県知事)から感謝状が贈呈された。

京都とともに日仏協会としてもっとも古い歴史を持つ社団法人・神戸日仏協会が、このほど創立100周年を迎え、去る2月9日神戸市北野の「神戸外国倶楽部」で記念祝賀会を開催しました。会にはアラン・ナウム仏総領事をはじめ、地元神戸や関西の多くの関係者のほか、全国各地の日仏協会の代表たちもかけつけ、この記念すべき日を盛大にお祝いしました。

神戸とフランスの最初の出会いは、1865年(慶應元年)仏・英・米・蘭の連合艦隊が突然神戸港に入港し上陸したときと言われますが、その後73年(明治6年)に「居留地」ができてフランス人も住み始めました。そして神戸日仏協会は1900年(明治33年)「パリ万国博」をめぐる相互の交流の中で誕生したのです。

モリス・グルド=モンターニュ駐日仏大使はメッセージで「全国に44の日仏協会があつて、フランスに関心を抱き、それを発展させ、在日フランス人を暖かく遇する努力を惜しまない。その中でもっとも歴史のある神戸日仏協会の100周年に際し、全国の日仏協会の皆様、とりわけ神戸の皆様に感謝の気持ちを表したい」と述べました。また参加した各地の日仏協会を代表して京都の谷岡会長が「京都も先頃100周年を迎えたが内々でささやかに祝っただけ。このような盛大な祝宴を催された神戸とのパワーの違いは、やはり食べ物の違い、ぶぶ漬けと神戸牛との差でしょうか」とユーモラスに挨拶しました。

なお同時に記念誌『神戸日仏協会100年誌』<Un Siècle Avec La France>(A4判、100ページ)も出版され、本会にも一部頂戴しました。閲覧希望の方は事務局まで。

ボルドーで感じたこと

杉本 静彦

4月5日夕刻、初めて訪れる地ボルドー着。雨上がりの様子らしく、街はしっとりと濡れていた。日本の初冬のように空気が澄んでいて肌寒く感じた。ホテルでひと息つき、外に出ると雨模様でとても寒い。こんな夜は熱燗で一杯、いやいやここはボルドー、街なかのワインバーでヴァン・ショー(ホットワイン)を一杯、二杯…。

三日間で十社のシャトー(ワイナリー)を訪問させていただいた。ぶどう畑では畝をくずし、あちらこちらで整枝作業を行っている。見る限りでは機械等はつかわず手作業のようだ。こんな広い畑、いったい何日かかるだろう。この時期のぶどう樹は発芽、そして小さな若芽が展葉を始めます。

シャトー内では、スティラージュ(ワインを樽から樽へ移しかえてオリ抜きすること)の作業をよく見かけます。

収穫時期は別として、畑やシャトーで働く人数はとても少ない様子で静か。薄暗いセリエ(ワインの貯蔵場)に立つと、どこかの山寺にいるような感覚になってしまう。

ボルドーと言えば綺羅星のごとく壮大で、きらびやかなシャトーばかりと思いがちですが日本の造り酒屋さんに比べると、よっぽど小さな建物です。

ドメヌ・ドゥ・ボルデさんを訪問中に、ワインを買いに来られたお客さんに出会った。両手には灯油を入れる18リットル入りのポリタンクのような入れ物を2本掲げておられる。家庭のお風呂の5倍くらいあるタンクからホースで量り売りしてもらっていました。日本ならボトル一本開栓したら酸化しないうちに飲んでしまわないと、と気を使ってしまうのに、彼らはそんな細かいことなど気にしないのか。それとも酸化する前に飲みきってしまうのか!

フランス国内でもワインの消費量が減っていると聞きます。しかしまだまだワインは水の如いです。甘口の白ワインで世界的に有名なソーテルヌ地区でシャトー・ラフォリー・ペラゲーさんを訪問させていただいたとき、私がこのワインは日本ではデザートやロックフォルチーズと一緒にいただきますが、こちらではどうですかと質問すると、きっぱりと「いつも料理と一緒にいただきます」。まだまだ食文化、習慣の違いを感じました。

滞在中は一日のうち数回は雨が(ときにはアメ玉ほどの雹が)降ってくるので傘が手放せません。かといって1日中降っているわけでもなく。春先の天候を心配されるぶどう生産者の気持ちが実感されました。

16時2分発、やっぱり冷たい雨が降っていました。無事に訪問を終えた安堵感と旅の終わりの少しばかりの淋しさ。そんな思いで小さくなっていくボルドー・サン・ジャン駅を眺めていました。あれからもう三年になります。

杉本静彦氏 四日市市富田にて『ワインケラーすずや』を経営。1997年、日本ソムリエ協会主催の権威ある第2回全国ワインアドバイザー選手権大会で、約300人の参加者中、最優秀・第1位の栄誉に輝いた。



シャトー・ラフォリー・ペラゲーで利き酒する筆者

フランスに生きる三重県人 (IV-1)

フランス人の夫とパリ郊外で暮らし始めた

清水みどり・マシュレさん

三重の皆様お元気ですか？私は今パリの北30キロほどにあるVal d'Oise(ヴァル・ドワーズ) 県のバルマン市に住んでおります。パリを少し離れるとだんだんアパートマンが少なくなり、赤い屋根のヨーロッパらしい家々とともに緑の畑や森が広がってきます。高速道路をパリから30分ほど走り、L'Isle Adam(リラダン)の森を抜けると、16世紀に建てられた小さいながらもゴシック建築の美しい教会、かわいらしい店が立ち並ぶ商店街、そして県名となったL'Oise(オワーズ河)、河のほとりには夏期のみ営業しているガーデン・レストラン、プール、パターゴルフ、貸ボート屋さんが並んでいます。そんな街並みを通り抜けたところに私の住んでいる家があります。また隣にはAuvers sur Oise(オーヴェール・シュル・オワーズ)の街があります。ここはゴッホが愛し住んでいた自然の多い美しい町で、あの有名な絵画の教会をはじめ彼の家、アトリエ、美術館、châteauがあります。

このように書くすとすてきな所に住んでいるなあと皆さんにうらやましがられそうですが、実際は回りには日本の人は一人もいず、11月にこちらに来て以来毎日のこどく雨が降り続き、慣れない異国の地で心細さが募る毎日を過ごしていました。(日本では何度も各地で大雪に見舞われそうで今年の冬は大変だったようですが、こちらは例年になく暖冬でいつにも増して雨が多かったようでした。)

こちらには小さな家を買ったのですが、日本と違い、築百年の中古住宅(?!)ばかりなので修理が大変です。フランス人は皆とてもインテリアにはこだわりを持っていて、多くの人買った家でも借家やアパートマンでも、それを自分たちの手で楽しみながらやっております。それでホームセンターのような所は週末になると人で一杯で、また迷子になりそうなほど広く、屋根、ドアから水道管、トイレ、お風呂、キッチン等、家中のパーツがあふれ自分で家を組み立てられそうに思えます。ちなみに私の家は築百年程ですが来てから1~2ヵ月の間は毎日壁紙をはがしたりペンキを塗ったり、そうこうしている間に家族が日本から遊びに来たりと落ち着かない日々を過ごしていたのですが、2月からパリ市内にある語学学校に通いだし、ほんの少しずつですがフランス語を理解することができるようになり始めてやっと憂鬱な気分もなくなり、それとともにお天気もだんだん晴れて良くなり暖かくなって、少しずつこちらの生活を楽しむゆとりができてきました。

私は津高校から鹿児島大学歯学部を卒業し、その後自宅から15分程の鈴鹿市内の歯科医院に勤務しておりました。ところがつとめてから5年目の春頃に近くの村で総合病院をやるので歯科の院長として来てくれないかという話がありました。完成は一年後の春で5月くらいから来てくれないかということでした。ちょうどそのころ語学留学をしてみたいと考えていたので、勤めていた医院をやめてその年の秋から翌年の春、村立病院ができるまでの期間をめどに、友人の宣教師の家があるカナダのエドモントンに留学をしました。留学前に家族とヨーロッパ旅行に行ったのですが、その時に主人との出会いがありました。その後1年ほどして結婚(村立病院の計画はバブルが弾けるとともに挫折してしまいました)、4年半日本で暮らしましたが主人の仕事の都合でフランスに引っ越すことになり昨年11月にこちらにきました。フランスに来てから3ヵ月たったわけですが、その間に体験し驚いたこと等について少し書かせていただきたいと思います。

商店の開店時間、サービスの考え方について

最初来た時なかなかできなかったのは商店が早く閉まってしまうこと。大きなスーパー以外は開店時間は9時~12時、3時~7時等が多く、これは役所や郵便局などの公共機関もしかり(ある郵便局では12時5分前なのに目の前で扉を閉められてしまったこともありました)。日曜日はすべての店が閉まっています。駅やパリ市内では自動販売機があるところもたまにあります。故障中であったりして、ある時は友人がコインをいくつか入れて返却されず1本のジュースを買うのに30フラン(日本円で500円くらい)も使ってしまう、なんだか共産圏にでも来てしまったような気がしました。ソファベットを買ったときは輸送料金を別に350フラン(6,000円ほど)支払ったのですが、それを二階の部屋に上げてもらおうとすると運悪く階段でつかえて通りません。そこでまた別に料金を払うから二階の窓を通してロープで上げてもらえないかと相談すると、そのようなサービスはしていないと断られました。24時間のスーパーや自動販売機(何もない山の中や古いお寺の境内にまで自動販売機がある日本の写真を見せると皆とても驚きます)が町のあちこちにありサービス第一が当たり前で、買った品物については最後まで何かと面倒を見てくれる。つくづく日本という国は世界に誇る便利な国なのだ実感します。

(次号に続く)

今年のフランス語入門講座(津)は4月2日から

今年はジャン＝フランソワ・ダメム先生お一人の担当により、下記のような要項で開講します。一般にオープンですが、会員の皆さんもフランス旅行に備えてこの機会にふるって受講してください。

日時 4月2日(月)より毎週月曜日、全12回 午後6時～7時
 場所 津駅前・第一ビル
 講師 Jean-François DAMÈME 先生(三重大学人文学部講師)
 受講料 一般 10,000円 三重日仏協会会員 8,000円

申し込み、お問合せは 菅谷(すげのや)さん 059-223-2690
 滝沢さん 059-225-2517

または <http://www1.mint.or.jp/~sfjmie>まで

なお、四日市市でも、今年度も来県予定のリヨン大学からの企業研修生に講師をお願いし、5月に開講の予定です。

ラヴェル弦楽四重奏団が新メンバーで来演

6/8 三重県海山町 6/13 名古屋市で公演

1996年、三重日仏協会10周年記念コンサートに出演して好評を博したフランスのラヴェル弦楽四重奏団は、昨年メンバーを一新し、国立エビアン劇場を根城に活発な活動をおこないヨーロッパで注目を浴びています。この6月には日本でのツアーがおこなわれますが、この地方では下記の2会場で久しぶりの演奏を披露します。とくに名古屋の公演はアリアンス・フランセーズ愛知フランス協会の主催ですが、名古屋に近い北勢地方の本会メンバーを中心に実行委員会が組織されコンサートの運営を支援しておりますので、会員各位の来聴を期待しております。

6月8日(金) pm 7:00 海山町中央公民館(みやまホール) 2,000円
 モーツアルト「アイネ・クライネ・ナハト・ムジーク」ほか
 ラヴェル 弦楽四重奏曲へ長調 ほか
 6月13日(水) pm 7:00 名古屋市 しらかわホール
 ラヴェル 弦楽四重奏曲へ長調 ほか
 当日券 4,000円(会員割引あり)

問い合わせは 四日市・豊田さん(0593-51-8031)まで

会員による演奏会・予告

4/6(金) 大廣朋子ピアノ・リサイタル
 pm 7:00 津リージョンプラザお城ホール
 4/26(木) 菅原美枝子ピアノ・リサイタル
 pm 7:00 津リージョンプラザお城ホール

7/22(日)『三重パリ祭』(シャンソン・コンサート)

司会・永六輔、石井好子・芦野宏・菅原洋一・平野レミ・山本リンダら有名歌手多数来演。三重県総合文化センター主催
 (この催しは毎年恒例の三重日仏協会「パリ祭」とは関係ありません)

(短 信)

尼子マリリンさんが英国へ帰国

夫君の故・哲男さんとともに本会理事として活躍された尼子マリリン・ロイドさんは、4月、長男宏志君とご出身地の英国ノース・ウェールズのRuabonに帰られることになりました。帰国にあたり、所蔵のたくさんのフランス語書籍(辞書、美術書、地図、B.Dなど含む)を本会に寄贈いただきました。その目録は次号に掲載します。

討 報

武田進・三重日仏協会初代会長が死去

1987年の会創立以来、7年間会長として三重日仏協会の発展に力をつくされた武田進氏(元三重大学学長)が去る2月7日ご病気のため死去されました。ご遺徳をしのび謹んでご冥福をお祈りいたします。